氏名	鈴木　伸子
ヨミガナ	ｽｽﾞｷ ﾉﾌﾞｺ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第421号
学位授与年月日	平成26年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉　ロベール・カンパン研究 ―周辺作品および15世紀から16世紀前半のネーデルラント絵画における受容の問題を中心として

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	田辺　幹之助
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	越川　倫明
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	佐藤　直樹
（副査）	東京藝術大学	教授	（大学美術館）	薩摩　雅登

（論文内容の要旨）

19世紀前半、ロヒール・ファン・デル・ウェイデン（ca. 1399/1400-1464）に関連づけられた作品群とは異なる特質を示すがゆえに逸脱するグループが形成された。「フレマールの画家」とは同グループの作者として措定された名称であるが、後にこの画家はロヒールの師であるロベール・カンパン（ca. 1375-1444）と同定されることで、同グループの作品の制作年代等もほぼ推定可能となった。留意すべきは、三点の板絵からなる「フレマール・パネル」（フランクフルト、シュテーデル美術館）等の基準作品を除いて、カンパンに関連づけられた作品の多くは工房、周辺画家の間で帰属が揺れ動いてきた点である。こうした作品群は、1990年代の科学的調査以降、シャトレ（1996）、ケンパーディック（1997）、テュルレマン（2002）のモノグラフや近年開催された展覧会において、弟子のロヒールやジャック・ダレ（ca. 1400-after 1468）、あるいは、作品の図像に基づく仮称の画家に帰属されてきた。しかしながら、画家の手を峻別する指標を確立することは困難であり、科学的調査に基づく帰属の解明も限界を迎えている。むしろ、帰属研究に拘泥することによって画家の美術史的な成果に立ち入ることが出来なくなるのではないだろうか。そこで本論は、基準作品に含まれてこなかったカンパンの後期作品、工房作品を含む周辺作品、追随作品を分析することで、15世紀から16世紀前半のネーデルラント絵画におけるカンパンの新たな位置づけを試みるものである。

第一章では先行研究を概観する。19世紀のパッサヴァンの初期研究から、ペヒト（1933、1989、1994）、パノフスキー（1953）等の様式研究、キャンベル（1976、1981）等の南ネーデルラントの絵画市場や工房の研究、ファン・アスペレン・デ・ブール等の1990年代の科学的調査を経て、近年のモノグラフと展覧会に至るまでの研究動向を辿る。

第二章ではカンパンの後期作品を再考する。後期作品はロヒールとの類似性ゆえにパノフスキー等によって否定的な評価を下されてきたが、近年の議論はこうした評価に追随し、後期作品をロヒールの初期作品あるいはロヒール工房に帰属し、カンパンの周辺作品と見做す傾向にある。しかし主たる論拠はモティーフの比較や下描きの様式分析に留まり総合的な考察は十分にはなされていない。そこでカンパンの初期、中期作品とロヒールの初期作品の造形的性格を把握した上で、カンパンの後期作品にして帰属の議論が集中する《ヴェルル祭壇画》（マドリード、プラド美術館）と《太陽の聖母子》（エクス・アン・プロヴァンス、グラネ美術館）等を取り上げる。後期作品が中期までに培った造形を把持しつつ、ロヒールやヤン・ファン・エイク（ca. 1390-1400/1441）の造形を摂取することで新たな絵画空間を構成すると同時に、先行作例とは一線を画する図像を形成していることを確認し、後期作品を積極的に評価し得ることを主張した。

続く第三章ではカンパンの原作が残された周辺作品を追う。基準作品である「フレマール・パネル」の《聖

三位一体（父なる神のピエタ／恩寵の御座)》、さらに《メロード祭壇画》(ニューヨーク、メトロポリタン美術館クロイスターズ分館）を指標として関連づけられる作品群を検討する。図像と造形、機能を確認し、造形様式と下描き形式の観点から周辺作品において原作がどのように受容されたのかを具体的に見てゆく。

第四章ではカンパンの原作が残されていない周辺作品に目を向ける。周辺作品の中でも質量とヴァリエーションに富んだ、「聖母の婚約」、「聖グレゴリウスのミサ」、「聖母子を描く聖ルカ」、「三王礼拝」を主題とする一連の作品を取りあげる。造形と下描きの様式や傾向に加えて、失われたカンパンの原型と周辺作品の関係を分析し、図像の展開と様式の波及を示す。以上の考察を踏まえて最後に、周辺作品と追随作品が15世紀末から16世紀前半に多数制作されていることに着目し、ネーデルラント絵画における擬古主義の動向においてカンパンの作品が担った役割とその意義を浮かび上がらせて結びとした。

このように本論では、近年の帰属問題に偏向したカンパン研究に対する問題意識から出発し、主として画家の後期作品、周辺作品、追随作品を分析の対象として、15世紀から16世紀前半のネーデルラント絵画までを視野に収め、ネーデルラント絵画における画家の位置を明らかにした。別巻のカタログに収められた多数の関連作品からもわかるように、カンパンの原型は周辺作品と追随作品に繰り返され多様に描かれている。イタリア絵画と拮抗したネーデルラント絵画の伝統への回顧現象のなかで、カンパンの造形と図像が重要な位置を占めたのではないだろうか。

（総合審査結果の要旨）

本論文は、トゥルネーで活動した初期ネーデルラントの画家ロベール・カンパン（ca.1375-1444）を対象とし、基準作も限られているこの画家の再評価を試みるものである。論文は４章からなる。第１章で筆者はまず、１９世紀から今日に至るまでの研究史の動向を整理し、この画家を巡る研究の問題点を指摘している。すなわちロベール・カンパンという画家の造形的性格と歴史的評価は１９世紀前半から２０世紀の半ばごろまでに徐々に確かめられてきたが、その中で、一時期カンパン工房で活動していたロヒール・ファン・デル・ウェイデンとの関わりが大きな論点として立ち現れる。とりわけカンパンの後期作品とロヒールの初期作品の間には、今日に至るまで帰属の曖昧な一連の作品が残されている。一方２０世紀後半に始まる科学調査の手法は下絵素描の様式とディテイルの比較研究に道を開き、カンパン研究に新たな視点を提供したが、その結果として２０世紀の末からカンパンとその周辺作品の帰属について、さらなる議論が起こっている。このように研究史の中でカンパン像はいまだに大きく揺れ動いているのだが、これに対して筆者は、時代様式との関わりで論じられてきた歴史的な評価と、科学的な手法によって確かめられる帰属の問題に分裂が生じていると指摘した上で、本論文の目的を、科学的な手法による知見と歴史的な評価に再検討を加え、また基準作のみならず失われた作品をも視野に入れて、カンパンに対する総合的なアプローチを図ることとしている。そのために筆者は、まず評価の分かれている後期作品の問題を取り上げ、さらにカンパンの周辺作品を１６世紀前半の作例にまで対象を広げて調査することで、初期ネーデルラント絵画に刻印されたこの画家の影響を確かめつつ、分裂したカンパン像を再構築しようと試みている。

第２章ではカンパンの後期作品が取り上げられる。その中心となるのはしばしばロヒールの手に帰されてきた《ヴェルル祭壇画》(プラド美術館)である。筆者は本作について、まず様式分析からカンパンに特徴的な造形が見られることを指摘する。そしてさらに下書き素描の分析を試みているが、そこで筆者は形態的特徴からすればロヒールの下絵素描に類似する本作のそれが、むしろ陰影を表したロヒールよりも彫塑性を際立たせるカンパンの下絵素描に近い性格を示していると指摘する。こうした観察から筆者は本作をカンパンの後期作品とした上で、ヤン・ファン・エイクやロヒールの作品から借用されたモティーフが絵画空間と現実空間のかかわりを再構築するためのものであるとして、パノフスキーらによって否定的な評価を与えられていたカンパンの後期作品に積極的な評価を与えている。筆者はさらに同様の分析手法によって、帰属が争われていた《太陽の聖母子》(エクス・アン・プロヴァンス、グラネ美術館）と《磔刑》(ベルリン国立絵画館）をカンパンの後期作品に位置づける。

第３章では、これまで基準作として挙げられてきた作品に関連づけられる周辺作品が取り上げられる。こ

の章の考察の中心となるのは、《聖三位一体》（フランクフルト、シュテーデル美術館）に関わる２点の作品、すなわちエルミタージュ美術館に所蔵される二連画パネルとルーヴェン市立美術館所蔵の祭壇画中央パネルである。筆者はそこでまず、カンパンの基準作であるシュテーデル美術館の《聖三位一体》について、この祭壇画平日礼拝面のグリザイユ像が視覚的現実に即した祈念像としての聖三位一体像であるという点にその革新性を認めている。そしてこの革新性は、基準作の構図が他の図像形式の作品に移植された際、それぞれの図像形式に即した新たな意味を獲得したとする。このような議論を踏まえつつ、筆者は造形様式と下書き素描の形式から、これら２点の作品をカンパンに近い位置にいた画家の手に帰する一方で、コリン・デ・コーテルや「聖血の画家」の同主題の作品を取り上げ、カンパンの受容が１６世紀の前半に至るまで見られることを指摘している。こうして筆者は、基準作に確認されるカンパンの生み出した図像が、さまざまな形で初期ネーデルラント絵画史の中に浸透してゆく過程を論証しているのである。これに続き、同様に後代まで継承されたカンパンの図像の例として、《メローデ祭壇画》の中央パネルに遡ることのできる受胎告知図が挙げられている。

第４章ではさらに、カンパンのオリジナル作品は確認できないものの、図像と様式の特徴からカンパンの原作に基づく可能性が提示されてきた「聖母の婚約」「聖グレゴリウスのミサ」「聖母子を描く聖ルカ」「三王礼拝」を主題とする一連の作品が取り挙げられる。これらの作品には、１５世紀に制作されたカンパンのコピーという説があるものから１６世紀前半に制作された追随者の翻案と見なされる作品までもが含まれている。そこで筆者はまず前者の作例について研究史を整理した後、様式批判と近年の科学分析の所見を用いてカンパンのコピーであることを確認し、さらに１６世紀の追随者の作例がどのようなかたちでカンパンの当初の構図を継承したかを調査する。そして上記のような分析をもとに筆者は、初期ネーデルラント絵画におけるカンパンの意味を総括している。すなわちカンパンは後期作品においても新たな創造性を発揮し、基準作だけではなく失われた作品を通じてネーデルラント絵画に多大な影響を与えたのみならず、１５世紀末から１６世紀初頭にかけてとりわけ多数の追随作品が制作されていることからして、ネーデルラント絵画がイタリア絵画の影響を強く受けた時期に至っても懐古主義的な潮流の中で、一定の存在感を示していたと結論づけるのである。

申請者の論文は、今日まで美術史上、多くの議論を呼んできた画家ロベール・カンパンを巡る膨大な研究史を整理しつつ、この画家に対する妥当な見解を示そうと試みるものである。１６世紀前半の追随者の作品を含めて筆者はカンパンに関連づけられる作品をカタログ化しているが、本論文はこうした基礎作業に支えられた包括的な研究として評価すべきものである。論文中の個々の問題についてはさらに考察を重ねる必要がある点も多く認められるものの、カンパンという画家に対する総合的な観点から膨大な資料を整理し、分析を加えることで独自の見解を示そうとしたという点において、博士論文の要件を満たす論考であると認められる。